

「言いたいことが言える時代に」「すべての人に平和な暮らしを」。  
ささやかな思いが積み重なり、今日の平和へとつながっています。  
今年8月15日で戦後70年。戦争体験者が少なくなる中、私たちは戦争  
の歴史や悲惨さを知り、未来へ語りついでいかなければなりません。

(企画・取材 企画政策部広報聴課)

# 生死を分けた5メートル

# 江別を襲ったロケット弾

## 7月15日、江別空襲

「ドン」おしりのあたりに  
棒で殴られたような鋭い痛  
み。手をやると弾で穴が空い  
ていた。

昭和20年7月15日、江別町  
(現江別市)の王子航空機(株)江  
別製作所で働いていた尾形俊  
雄さん(当時18歳)は突然襲つ  
てきた米軍機グラマンの攻撃  
で、重傷を負いました。江別  
空襲の負傷者の一人です。

「まさか江別まで襲われるな  
なんて」尾形さんは、軍の命令で  
製紙工場から航空機工場へ転換  
させられた王子航空機(株)江別  
製作所の部品管理課に配属さ

れていました。入社して1年、  
軍事施設として敵に場所が把  
握されているとは思ってもよらな  
かったといえます。

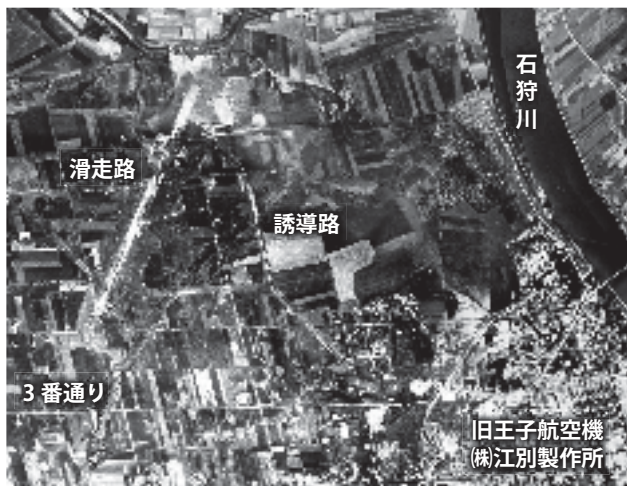
昭和16年から始まった太平洋  
戦争の戦局が深刻化する中、昭  
和19年から米軍は日本本土への  
空襲を本格化。北海道も昭和20  
年7月14日、15日の2日間で各  
地が襲われ、2900人以上の  
犠牲者が出ています。江別では  
軍需産業だった「王子航空機(株)  
江別製作所」、重要産業の「日本  
発送電(株)江別火力発電所」が狙  
われ、4人が亡くなり、8人が  
負傷したと言われています\*。  
その日、日曜日にも関わら  
ず出勤していた尾形さんは、



尾形 俊雄 さん (88歳)

戦時中、王子航空機(株)江別製作  
所の部品管理課に配属され勤務。  
現在は詩人として活躍している。  
苫小牧市在住。

戦後70年特集  
つなぐ  
戦争の記憶



狙われた江別／左の斜めに白く見える部分が旧飛行場の滑走路  
(写真は昭和30年代のもの)



江別空襲で投下された米軍の弾の一部、江別警察署前（現コミュニティセンター付近）



昭和19年頃から防空壕は町内くまなく作られた

午前中に警戒警報が鳴ったため、防空壕に避難。何事もなく職場に戻ってから数時間後、突然けたたましい音がし、ロケット弾が天井を突き破り落ちてきました。目の前の課長が視界から消え、尾形さんは机の下に潜り込みましたが、すごい痛みを感じて倒れ込みます。「やられたー」機銃掃射が始まり、床に銃弾の跡がびっしりとつづのが見えました。

「課長は頭に弾が直撃して即死だったのかも…生死を分けたのは5メートルほどのわずかな差でした。」  
**犠牲者は住民**  
江別空襲の犠牲者はいずれも銃後を守る住民。「戦争では軍人も一般住民も関係ないのでしよう」尾形さんの肉親や身近な人も戦争で犠牲になりました。自分が受けた傷も、傷跡が残り、今も痛みます。「滅茶苦茶で大変な時代。毎日を生きることに必死でした。」

**間近で目撃**

成田朗彦さん(80歳)は、

江別空襲で火力発電所をめぐって機銃掃



成田朗彦さん(80歳)  
江別市在住

射を行う米軍機を間近で目撃しました。  
当時10歳、千歳川鉄橋近くの河原で遊んでいると爆音とともに、空に黒い塊が見え、ずんずんと大きくなりました。直後「ダダダダダ」と射撃音が聞こえ、発電所の屋根と壁が剥がれ飛びました。「必死になって土手に伏せ、体を固めると、弾が鉄橋にあたり、川の中に弾が突き刺さりました」助かったと喜びましたが、恐怖は現在も残るといいます。「パイロット

**● B29・グラマン・隼の比較**

(上から B29、グラマン F6F、第54戦隊隼)



出典：『語り継ぐ札幌市民100人の戦争体験(上) (札幌市2013)』

の高い鼻、長い頸が見えるくらい近くで見ました。今でも飛行機が通るたびに恐ろしく、嫌な気持ちになります。」  
※江別空襲の犠牲者・負傷者数はいずれも『新江別市史(江別市2005)』を参考にしています。『北海道空襲犠牲者名簿(山本竜也2011)』では、江別空襲の死者は5人とされています(江別空襲の負傷者は10人、13人など諸説あり)。

**昭和20年7月15日 江別空襲の被災状況**

攻撃	時刻	空襲の状況および被災状況
第1波	午前5時30分頃	グラマン F5,F6" ヘルキャット "7機来襲。2番通り野幌方面から飛行場の滑走路にかけて機銃掃射。
第2波	午前6時50分頃	グラマン同型機3機来襲。野幌、厚別間を運転中の函館行き上り列車(408列車)めがけ反復機銃掃射。列車は旧三愛女子高校(現野幌若葉町)の辺りで停車。4人の重軽傷者を出す。
第3波	午後3時頃	グラマン同型機4機、石狩方面より来襲。王子航空機製作所にロケット弾4発投下。同社員1人死亡、4人が重軽傷を負う。また付近の長屋住民1人が流れ弾に被弾して死亡。また、日本発送電(株)江別発電所にも数発のロケット弾が発射され、流れ弾が対雁墓地内の無常堂に落下、2人死亡。

(参考『えべつ昭和史(江別市1995)』)

戦時中、女性やお年寄り、子どもたちは「銃後を守る」ために、苦しい生活を強いられました。贅沢は許されず、空腹に耐えながら、毎日を懸命に生きていました。

# 銃後の生活

人手不足、物もない

江別駅から戦地に向かった出征兵士たちを見送ったのは、役場関係者、在郷軍人、町内会の人々とともに、国防婦人会や愛国婦人会に属する女性たちでした。彼女たちは



上/出征の見送り、江別駅前  
下/愛国婦人会の皆さん

出征、帰還の送迎、慰問袋（日用品などが入った袋）の作成、防空演習の参加などで兵士たちを支えました。「銃後のことは心配せず、心おきなくお国のために奮闘するよう」呼びかけたのです。しかし、銃後の生活は厳し

いものでした。働き手が奪われた農村などでは、生産力が低下。食糧が不足すると、配給制が敷かれましたが、量は十分とは言えず、みな腹を空かせ耐えていたといえます。衣料も切符制となり、物不足が深刻化していきます。

現在の一番町に住んでいた八重崎道子さん（75歳）は当時の状況を語ります。「買っていくっても物がありません。昔はあったお菓子のことを兄に聞いてうらやましく思いました。とてもひもじかった。武器不足を補うため、一般家庭から金属類などはすべて国に差し出すことが強要さ



金属回収の様子。金属のほか、火薬に使われる古綿も集められました。



八重崎 道子さん（75歳）  
江別空襲では現在の一番町にあった自宅屋根スレスレに飛ぶ、米軍機を目撃しました。江別市在住。

れ、お寺の鐘や橋の欄干さえ金属は一つもありませんでした。「母は、たった一つの金の指輪を差し出した後、母親の形見が無くなったと小さい声でいつまでも言っていました。戦争は子どもも大人も関係なくすべての人を苦しめます」。

産めよ増やせよ

労働力の不足、食糧の統制などによって、全てのものが不足する中、赤ちゃんだけは増



江別町役場（現6条8丁目）の防空演習。高齢の男性と10代の女性がバケツリレーで火消しの練習をしています。八重崎さんのお姉さんも参加（八重崎道子さん蔵）。

えていきました。日中戦争以降、出生数が見えて減ったことに危機感を抱いた国は、国策として「多産報国」を打ち出します。江別も例外でなく、戦争の深刻化、出征兵士の増大にも関わらず、結婚と出生数は増加傾向でした。満足に食べるものもなく、金属類から古綿まで供出を強いられ、あげくにお国のために毎年のようにお腹を痛めて子どもを産む、それが典型的な銃後の生活でした。

不足するアルミニウムの代わりに木で作られた木製戦闘機キ106。  
木製戦闘機を作らなければならない「悲しい時代」がありました。

# 木製戦闘機キ106



「木製戦闘機キ106」  
モデルは陸軍の主力戦闘機、四式戦闘機「疾風」。キ106の飛行速度は時速580kmで、スピードは零戦や隼を上回りました。

## まちをあげた大事業

昭和20年6月11日、2千人の関係者が見守る中、一機の戦闘機が江別の大空に空高く舞いました。軍は、不足する金属の代わりに王子製紙(株)江別工場へ木製戦闘機の製造を命令。江別で木製戦闘機キ106が作られることになりました。

江別は王子製紙(株)を中心に製紙の街として発展してきたまち。航空機工場への転換は大きな意味がありました。

労働力不足を補うため、14歳〜25歳の未婚の女性からなる女



4番通り6丁目付近から北北西に伸びていた旧飛行場。昭和50年代の宅地造成まで姿をとどめ、現在は誘導路跡だけが残っています。

子挺身隊が編成され、全道各地から集められたほか、大規模に採用された工員の多くは14歳ほどの幼年工で、全道各地から約千人、現在の江別小、第三小の高等科卒業生110名も含まれていました。従業員は4600

人へのぼつたといい、当時の江別の人口は2万6000人ほどですから、その事業規模の大きさがうかがえます。

言いたいことが言えない

当時13歳、学徒動員で働いた佐藤明さん(木製戦闘機キ106を語る会会長・83歳・江別市在住)は「配属されたことが嬉しく、何の疑問もなく働きました」と当時を振り返ります。飛行機の名前や作った部品が何かも知らされませんでした。「二号機が飛んだときは感動して涙が出ました。一生忘れられません」。

しかし、およそ1か月後、北

海道空襲で喜びも吹き飛びます。「自宅近くを飛んでいく大きな敵機を見て、震え上がりました。心の中で木製戦闘機では敵わないと思いました」。



大麻高校演劇部部員にキ106と学徒動員の体験を説明する佐藤さん(平成27年5月14日)

使われなかったキ106

木製戦闘機は終戦までに江別で3機が完成。いずれも実戦には使われることがないまま、終戦を迎えます。戦後は日本国内で作られた10機のうち2機がアメリカに移送され、そのほかはすぐに解体。関係書類はことごとく廃棄されました。「内心は解体されてよかったと思っています。撃ち落とされたと聞かされるよりもずっと。日本は資源のない国ですから、戦争になるとどんなに国民生活に影響するか」と佐藤さんは今でも、その胸の内を明かします。

『幻の木製戦闘機キ106』(2008年)の著者田中和夫さん(82歳・札幌市在住)によると、戦争が長引けば、キ106はいずれ特攻機になる運命にあったといえます。「離陸すると主脚が外れる戦闘機の図面(キ115「剣」と考えられる)があったようです。そこまで追いつめられていました」。幻と言われた木製戦闘機的全貌は、関係者の証言で早苗別川河畔で平成6年に発見された金属ケースに入った約5000枚の文書などからわかってきました(早苗別川文書)。現在、キ106の資料や外板、車輪などが江別市郷土資料館で展示されています。

【郷土資料館前期ロビー展】

「木製戦闘機が作られた時代」

7月18日(土)〜9月27日(日) 9時

〜17時。無料。詳細/郷土資料

館 ☎385・6466

「言いたいことを  
言える国にしよう」

私たちは戦争を知らない世代  
同時に語り継いでいく世代でもある

# つなぐ

大麻高校演劇部が  
木製戦闘機をテーマに劇

今年6月14日、江別市コミュニティセンターで大麻高校演劇部が木製戦闘機をテーマに演劇「青藍の空高く」を上演しました。札幌開催の高校演劇支部大会で観劇した佐藤明さんが「江別の人にも見てほしい」と同部に依頼。江別公演が実現しました。

舞台は現代。高校生の主人公が祖母の残したノートから木製戦闘機に従事した人々の姿を演じる「劇中劇」で、女子挺身隊の姿を中心に、木製戦闘機の初飛行、戦地に赴く兵士の江別駅からの見送り、江別空襲などが語られ、また、



公演後、女子挺身隊として従事していた方と交流し、涙する生徒

現代の高校生が戦争の歴史と向き合う姿が描かれています。劇中では当時の人々が戦争への不信を抱きつつも「言いたいことが言えなかった」重苦しい雰囲気と現代の日常生活で「思っただけでもなんとなく言えない」歯がゆさが重なります。最後に木製戦闘機的设计士が「これからは言いたいことを言える国にしよう」と訴えました。

高校生へ受け継がれる思い

生徒たちは当時の状況を勉強し、実際に飛行場のあった場所を訪れたり、佐藤明さんの話を聞いたりして、演劇に取り組んできました。

公演後の挨拶で、上野風香

部長が「この劇に関わるまで、木製戦闘機のこと、戦時中の江別のことを何も知らなかった。今好きな演劇を続けていくのは過酷な時代を生き抜いてきた人がいたから。過去にあつたことを忘れず、平和について考えていきたい」と来場者に挨拶。会場は鳴りやまない拍手と涙に包まれました。

公演後、女子挺身隊として従事した方と交流し、抱き合い涙する生徒も。真剣に向きあう等身大の高校生の姿に多くの人が感動し、心を動かされました。

江別から世界へ

「平和と民主主義」をテーマに弁論で数々の賞を受賞してきた立命館慶祥高校弁論研究部。

昨年、全国高等学校弁論大会で第3位となった葛西小鈴さんは紛争解決請負人として活躍する方の話と自分の経験をもとに、現代の社会問題に対する若者の役割などについて論じました。「卒業後も平和に



葛西小鈴さん  
(立命館慶祥高校3年18歳)

# 未来へつなぐ平和

ついで自分の言葉で伝えていきたい」と葛西さん。自分の意見を言える場を自分自身で作っていききたいと意欲的です。

「弁論したことは有言実行することが部の決まり」と顧問の江口準教諭が話す通り、1999年の創部から「平和

と民主主義」の考えを培った弁論研究部の卒業生が江別の地から羽ばたき、世界で活躍しています。

平成26年10月26日、市制60周年記念式典で、江別市は「平和都市宣言」を披露し、恒久平和を誓う象徴として建てた

過去から未来へ、平和への思いをつないでいく必要があるのです。

平和の碑の除幕式を行いました。宣言文は先人の歴史や文化を引き継ぎ、一人ひとりが確かな意思を持つて平和な社会を作るため、意志を持つて行動する誓いで締めくくられています。

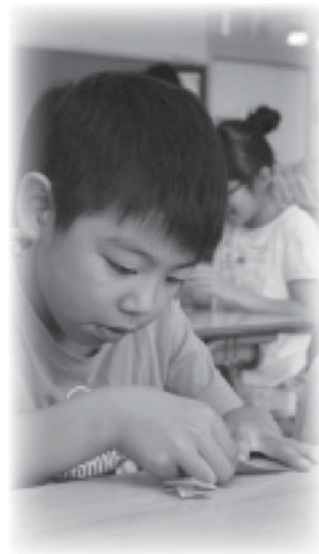
終戦から70年。私たちには、

## 江別市平和都市宣言文

この世に生命（いのち）を与えられたすべての人々は、平和で安心した暮らしを願っています。

しかし、世界の各地では争いが絶えず、また、大量の核兵器が世界の平和と人類の生存に大きな脅威を与えています。

わたしたちは、世界唯一の被爆国として、広島・長崎の惨禍を繰り返さないように、核兵器廃絶を強く訴え、戦争のない平和な世界の実現を求めます。



折り鶴を作る児童  
(第二小学校)

今年7月22日、戦争で亡くなった方を追悼し、恒久平和を祈念する「江別市平和のつどい」が開催されました。つどいでは広島島の平和記念公園にある少女の像に捧げるため、市内各小学校で折られた千羽鶴が市長に伝達されました。

そのために、世界中の国、地域、人々の交流の輪を広げ、互いの個性や違いを理解し尊重し合うことが必要です。

わたしたち江別市民は、豊かな自然と先人が築いた歴史や文化を引き継ぎ、平和な社会をつくるため、家庭や地域において一人ひとりが確かな意思を持つて行動していくことを誓い、ここに江別市が「平和都市」であることを宣言します。

平成26年8月15日

江別市長 三好 昇



## 「戦争の記憶」にご応募いただきありがとうございます

広報5月号で募集した「戦争の記憶」には、13名の方からご連絡をいただき、戦時下のまじりの様子や辛い体験、平和への思いなどさまざまなお話を文書とインタビューを通じて、お聞かせいただきました。紙面の都合上、全てを掲載することはできませんでしたが、編集の際に大変参考にさせていただきました。

生徒動員で働いた体験、樺太での戦争体験、パラオから船で命からがら引き揚げてきた体験、東京空襲、広島島の原爆の体験、海軍飛行予科練習生の体験など、どれも胸を締め付けられる辛く苦しい体験談でした。遺族が亡くなられた方もいらっしやうて、「戦死した父親の遺骨と言われ、渡された箱には木片しか入っていません」というお話も



写真は父親の遺骨と言われ渡された木片（山本實さん蔵、江別市在住）

取材や資料提供にご協力いただきました皆さん、読んでくれた皆さん、ありがとうございます。ご期待の企画政策部広報広聴課8月号特集担当（保坂）

広報誌の感想をお寄せください  
広報広聴課 〒067-8674 高砂町6  
☎ 381-1009、FAX 381-1149  
Email=koucho@city.ebetsu.lg.jp

### 主な参考文献

- 『えべつ昭和史』江別市 1995年
- 『新江別市史』江別市 2005年
- 『幻の木製戦闘機キ106』田中和夫 2008年
- 『江別の歴史』江別の歴史を語る会 1984年
- 『語りつぐ北海道空襲』菊地慶一 2007年
- 『北海道空襲犠牲者名簿』山本竜也 2011年
- 『語り継ぐ札幌市民100人の戦争体験(上)』札幌市 2013年